

共生思想考（Ⅰ）～他者存在の意味～

神 谷 正 義

Ⅰ、共生への関心の高まりとその背景

国立国会図書館による『雑誌記事索引』CD-ROMによつて「共生」をキーワードとする雑誌・記事が一九九〇年では五五篇であつたものが一九九八年には四六〇篇と約九倍にまで増加し、この十年間では一九〇五篇と数多くの研究成果が報告されており、共生への関心の高まりを知ることができる。一九九八年には日本仏教学会で「共生」が統一テーマとして取り上げられ、仏教の立場からも関心が高まっている。

これらの関心の高まりの背景には「非共生的現象」が顕著に表れていることと無関係ではない。古くは産業革命以降、とりわけ一九六〇年代以降の急激な科学・技術の発展は特に生命の操作を可能にし、クローン技術まで行き着き、さらに大量生産・大量消費による資源の枯渇問題を表面化させてきた。また化学合成物質の多用による生態系の破壊が顕著となり、土地倫理や世代間倫理を問うこととなり、人体への環境

ホルモンの影響も真剣に取り沙汰されるようになってきた。人間の飽くなき欲望充足の代償が環境破壊を引き起こし、生態系を攪乱し、ひいては人類の存亡すら危ぶまれる状況にまで至つた。また酸性雨・森林破壊・砂漠化・温暖化など人間と自然との関係のみならず、人間と人間の関係においても「非共生的現象」が日常現象化してきた。いじめや性差別、さらには南北問題などそれである。また「民族浄化」「聖戦」という言葉によつて異民族を排除し、さらには宗教的な側面において原理主義に見られる宗教紛争は過激な様相を呈し、世界的規模で「非共生的現象」が生起している。

こうした現実の中にあつて、新たな人類の指導原理として提唱されるのが正に「共生」であり、このことに答えることが仏教に強く要請されている。この論考では主として、生態学・生物学における共生に関する研究成果を参考にしながら、それに対応する仏教思想を検討していきたい。

II、生態から見た共生の理念

生物学・生態学における「共生」(symbiosis)は異なつた種が共に住む、いわゆるLiving-togetherの意味であり、その種間関係には①搾取関係(捕食・寄生)、②競争関係、③双利関係がある。

①搾取関係(捕食・寄生)は一方が利益を得て他方が損をする関係のことで、捕食者や寄生者が自分の子孫を残すうえで他者(餌生者・宿主)に損害を与える。しかし、いかに利己的な遺伝子(つまり自己の子孫をいかに存続させるかを基本として活動している)を基本とするも、例えば捕食者はすべての餌生者を食い尽くせば自らの生存基盤を失い存続を危なくする。したがつてこの関係では捕食者と餌生者との共存か、すべてが絶滅するか、餌生者だけが生き残るかのいずれかであつて、弱肉強食の関係であつても常に強者が生き残れることにはならない。二種以上の餌生者をもつ捕食の場合でも同様であると同時に、餌生者の方から言えば、多くの(食べられる他の)種があることが自らの繁殖(存続)を助けていることになる。こうした捕食関係では捕食者が絶対的に優位に存在するわけではない。例えば花は花粉や蜜を昆虫に搾取されることで授粉に成功し、捕食する側も捕食される餌生者も共に利益を得ている双利関係にある。自らが他者の生命を支えることが自

己の繁栄につながっていることは注意を要する。

一方、寄生関係は宿主に寄生して栄養を搾取し、宿主の成長や繁殖を妨げ、生存率や繁殖率の低下をもたらすが、寄生者は宿主なくして存続できないため宿主をすぐに殺したりはせず、できるかぎり自らの子孫の繁殖を可能にするように宿主と関係をもつ。この関係が長期にわたることによつて次第に両者は共存を可能にしていく。いずれにせよ搾取する寄生者であつても他者である宿主を殺しては自らの存続を危なくすることになる。

②競争関係とは相手がいることで互いに繁殖を妨げられる関係のことである。寄生バチが一個体に多くの卵を産む場合、一匹しか生き残れなかつたり、共倒れ競争といわれるように、いずれの卵も死なないかわりに成長が悪く次世代への繁殖を低下させる場合などのことである。また二者の間の種間競争が激しく、一方が優勢であつても無限に増殖することではなく、環境収容量の許容上限で平衡状態を保つようになる。また一方の種しか存続できない場合で初めから個体数が多いほうが存続する競争排除の関係もある。この場合は種間競争が激しい場合で、こうした競争を避け種の存続を図るために住みわけや食い分けをしている。他者に生きる糧を提供することによつて自らの生命の保全がよりよく保たれているということである。また自らの形態を変えて存続しているのである。こ

れに対して種内競争（より近い関係にあるもの）が激しい場合は二者が共存することがある。一方が極端に増殖することで自らその悪影響を受け、他方に対して影響を強く及ぼさないことによる共存も見られる。両者の関係において最も望ましくない競争関係であっても生態系の中では互いに生存を可能にするべく関係性の中で自らを進化させてきているのである。従って国同士の軍拡競争は、かりに絶対的優勢に他国を絶滅させたとしても自らの国力を低下させることになり、政治・経済において悪影響を受けることになるし、両国が軍事力においてバランスがあつたとしても、軍事力の強化拡張は国勢を低下させることになり、いづれにおいても軍拡競争は愚策であることを教えている。

③ 双利関係とは互いに相手がいることで繁殖上の利益を得る関係のことである。この関係は他者の存在が自らの生命の保全と子孫の繁栄をもたらす関係であり、共生を言う場合の多くはこの関係をさしている。例えば牛とルーメン内微生物に見られる消化共生では互いに相手がいないと生きていけない関係であり、互いが生かしあっている関係である。

ありとあらゆる生物は他者の存在を前提として生きている。このことは我々人間においても同様で、だれ一人として一人では生きていけない関係存在である。その関係が遮断され排除されるところに「非共生的現象」を立ち現われてくる。他

者を排除し、自己に合わない他者を切り捨てていく閉鎖的な社会は「共生社会」とは言えない。あらゆる生物が生存し共生するためには、①不殺生を基本理念として、②関係存在（縁起生存在として今現存している）であることを自覚し、③他者を排除（閉鎖性）せず（開放性）、個体の個性を尊重する、④自らの在り方を関係の中で変えていく（自己中心性を捨てる）こと、そして⑤すべてのものが循環系であること、が不可欠である。多様な生物が豊かに生存するためにはこの五項目の理念は人間と人間の関係においても、人間と自然との関係においても、また経済・政治・教育などの人間の諸活動においても適応すると言える。こうした事柄を生態の具体的な事実のうえに眺め、その在り方を仏教思想に求めてみたい。

Ⅲ、他者存在の意味と仏教思想

① 双利共生の典型として消化内共生である牛とルーメン内の微生物と原生動物の関係を上げることができる。牛が食べた草を消化するのはルーメンの中に生息する微生物である。

この微生物をなくして牛は生存できない。また微生物もルーメンの中でしか生存できない。繊維質であるセルロースを分解して栄養源を牛に与える微生物は酸素を嫌う偏性嫌気性菌であるが、餌と一緒に取り入れられた酸素を摂取する通性嫌気性菌がその酸素を摂取して偏性嫌気性菌の酸素によるダ

メージから守り、その生存を助けている。またルーメン内で増殖した微生物は原生動物によって摂取され、その数は一定量に維持されている。牛のルーメンは草を起点とした、細菌・小型原生動物・大型原生動物にいたる食物連鎖と排泄物によってリンクされた循環系であり、それは不均質性によって成り立っている。

異質なものが多様に係わりあい、それぞれが個性的な働きを機能し、他種が不必要として排出したものを利用し、循環している系であり、その系は開放されている。互いが他者の存在によって生かされ、他者によって自己の性格が規定され、それぞれが他者を生かす働きを行うことによって生かされ、他者によって自己の性格が規定され、それぞれが他者を生かす働きを行うことによって全体としての安定（共生）が図られている。この密接な関係は縁起生存在として、無我（自己中心性の否定）なる存在であることを表し、そのことが共生を成立させているのである。

② 不必要なものとして排出したものを利用して生きる存在については、寄生から共生へのプロセスにおいて重要な要素である。どのような条件のもとで、寄生から共生にいたる進化が起こりうるのかを数理モデルを用いて研究された結果によれば、自己に不利益を与える他者との共生は、一つには世代を越えて特定の個体どうしが長くつきあうことと、もう一

つは相手の不用物を互いに有効利用すること、によって成り立つとされる。長く付き合うということは相手をよく理解することであろうし、不用物を利用し合うことは与えられたものの中で満足するという、少欲知足・清貧の思想につながるものとも考えられる。そうすることによって異質な者同士との共生が可能となるのである。

③ テツポウエビとハゼの関係からは次のことが指摘されている。テツポウエビは視力が弱く目で外敵を確認し行動することができないので、ハゼに目の役割をになっってもらっている。一方テツポウエビのつくった穴（棲み家）をハゼは外敵から身を守る隠れ家として利用している。ハゼは相手を目で確認しているのに対して、テツポウエビは、ハゼの身から分泌する物質を頼りにして命を保全しているのである。このように互いに不足する機能を補い合うことによって両者が安全に生活する方法を確立している。自己の完全性（万能・絶対性）の否定とその自覚が、よりよく生きることと密接な関係にあることを知ることができる。このことを通して微生物化学を専攻する小沢正昭氏は「現代のように科学技術に依存し、それを万能と思っている間は他の生物の能力に助けられる状態にはなりえない」とまで述べている。

④ 同一生物であっても時間と場所の変化によって形態を変え、根と根粒菌との関係から報告されてい

る。関係の中で性格や形態が変化するという無常性である。そのことが互いにいのちを保証し合う関係となる。根に根粒菌（窒素を栄養源にかえる働きをもつ）が付着すると根は曲がって菌を保護し、菌は卵状から感染糸として糸状に変化し、根毛の皮膚を貫通して核をめざして伸長し枝分かれして複数の細胞の中に侵入していく。侵入すると感染糸の先端が破れ、根粒菌が細胞内に放出され、さらに形態をY・T字型に変化し肥大化していく。そして窒素固定に必要な酵素を分泌する。窒素は体内を移動してアミノ酸の原料としてまめ科植物に利用されているのである。仏教で言う諸行無常・諸法無我の実際を展開している。

⑤能力・形態の変化は苛酷な自然条件下では生き延びるために不可欠である。自己のあり方を変えていくことが重要である。その代表的なものが食い分け、棲み分けである。とらわれた自己に固執せず、自己を少し譲ることによって多様な生物の生存を可能にしている。イワナとアマゴ・ヤマメは川の上流と下流に棲み分けているが、棲み分けなだけで共存する淵では底の生物をつついて捕食するものと水面上から落ちてくる生物を捕食するといった食い分けが行われている。

⑥他者との関わりによって形態を変えることと異質な他者の存在が自己にとって利益となることについてはタンガンーカ湖における鱗食魚や捕食性ダニと捕食者と植物の三角関係

の生態から見るができる。前者では自己と同種よりも異種の存在が鱗食の成功率を上げることが証明されており、かつ鱗食のために口先が左に曲がっている。また後者ではナミハダニは豆の葉を食いつぶすが、葉はナミハダニによって食べられると特殊な化学物質を出してナミハダニを食うチリカブリダニを引き寄せて、ナミハダニに食われることから防御している。このように異質な他者（主張を異にする）の存在が決して自己に不利益を与えるとは限らず、自己のいのちを生かしている場合もあるのである。

こうしたことを踏まえて川那部浩哉氏は「生物とはそもそも、他の生物の存在を前提にし、他の生物とさまざまな関係を持つことによって、良かれ悪しかれ、生活を続けていくように成立しているものである。この点で生物間の関係は相互依存的であり、時間を長くにとってみれば、少なくとも結果として相互扶助的である」と述べている。

4、おわりに

以上のことから生態系の在り方からしても、仏教で言う「縁起」、三法印の「諸行無常」「諸法無我」の思想は現代の生物学・生態学の研究成果と少しも矛盾しないし、その成果は仏教思想に則ったものであることが理解される。「共生」とは突き詰めれば互いの「いのち」を生かし合うといった理念

である。その根底に他者の存在が不可欠であり、他者との関係を遮断し排除する排他的態度や自己中心的な在り方（我執・自己の絶対性の主張）は批判されるべきで、他者に対して閉鎖的でなく開放性でなくてはならない。そのためには互いに他者の個性を尊重しあい、補い合っていくという行動原理が必要とされる。すべてのものが関係性において変化し循環する中で自己のいのちが生かされていることの自覚が求められる。そのいのちは異質な他者の存在を認め合うところからスタートするといっても過言ではない。個性が尊重されることは生きていくことの意味を質的に高めることでもあり、生きがいにも連なり、よりよく生きることにつながる。従って、「生 || いのち」を支え合う無限の他者のいのち（無量寿 || *amitayus* || 阿弥陀仏）への帰依・信仰を縁起の立場から主張して、大正十一年に新しい仏教運動として起こした椎尾弁匡氏の「共生会」運動は高く評価される。この「共生会」の理念や浄土教と共生思想の関連については尾文正畑氏の貴重な論考もあり、別の機会に論及したい。また個のいのちを支える無限のいのちを自然界の自律的秩序形成機能（阿弥陀仏の働きとも理解できる）にとらえ、「共創」の概念を提示する物理学者の石川光男氏の論考や教育を「共育」ととらる仏教学者の水谷幸正氏の主張については稿を改めて論じたい。

参考文献①松田裕之『「共生」とは何か』現代書院。②藤

共生思想考（一）〜他者存在の意味〜（神谷）

田紘一郎『共生の意味論』講談社。③川那部浩哉『生物界における共生と多様性』人文書院。④川那部浩哉監修『シリーズ地球共生系』6巻、平凡社。⑤川那部浩哉監修『シリーズ共生の生態学』7巻、平凡社。⑥栗原康『共生の生態学』岩波新書。⑦小沢正昭『共生の科学』研成社。⑧『季刊・仏教』四三号「特集共生の思想」法蔵館。⑨岩槻邦男『生命系・生物多様性の新しい考え』岩波書店。⑩坂田・阿山・宗像編『二一世紀に生きる共生』学文社。⑪竹沢尚一郎『共生の技法』海鳥社。⑫間瀬啓充『エコロジーと宗教』岩波書店。⑬小田実『「殺すな」と「共生」』岩波ジュニア新書。⑭加藤尚武編『環境と倫理』有斐閣。⑮武田一博『市場経済から共生社会へ』青木書店。⑯内橋克人『共生の大地』岩波新書。他略。

（キーワード）共生、他者存在、縁起

（東海学園女子短期大学助教授）